

毛皮交易史の研究(3)

——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度——

下 山 晃

はじめに

第I章 中世「国際商業」の展開と毛皮交易

- 1 ヴァイキング
- 2 ロシア商人の起源
- 3 ハンザ同盟の抬頭
- 4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇（以上、51号）

第II章 ユーラシア毛皮交易圏

- 1 ヨーロッパ=イスラム商業圏
- 2 モンゴル帝国と毛皮取引
- 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場（以上、52号）

第III章 植民期アメリカの毛皮交易

- 1 白いインディアン
- 2 ハドソン湾会社の創設
- 3 セント・ローレンス商業帝国（以上、本号）
- 4 ニューイングランド連合
- 5 製帽工業と重商主義
- 6 人種奴隷制プランテーションと毛皮

第IV章 毛皮の世界フロンティア

- 1 コサックの東漸
- 2 アリュースシャンの受難
- 3 ノア・ウェスターズ
- 4 アスターズ・トラストと広東貿易
- 5 アメリカ西部の毛皮フロンティア

第V章 極東の開国と毛皮

——世界フロンティアへの三つの通路

- 1 中露陸路貿易ルート
- 2 夷館取引の展開
- 3 日本の開国・文明開化と毛皮

おわりに

——掠奪のシステムの帰結

第三章 植民期アメリカの毛皮交易

1 白いインディアン

経済史家の間では、16世紀ヨーロッパは概ね「拡張」の時代にあったとみなされている。この世紀の内に、人口の激増・物価の急騰・遠距離貿易の飛躍的伸長、そして都市化の進展が一気に訪れたといわれるのである。

ところが、この「拡張」の時代は、生態系という要素を加味して再検討してみると、資源的限界に行きあたり、いわばボトルネック・インフレーション(隘路インフレ)の危機にとり囲まれていたらしいことが推察される。早くも中世末期において毛皮という一種の森林資源が生態学的な枯渇の危機に頻していたことについてはすでに前号までにコメントしておいたが、農地の不足はいうに及ばず、製鉄用高炉の普及などによる木材の不足と、漁法・食習慣の変化に基づく水産資源の枯渇は、とりわけ深刻なものであった。急激な人口増は、あらゆるネックの根源となった⁽¹⁾。

わが国では西洋漁業史・アメリカ漁業史に関する本格的な著作が皆無に等しい状況であるため、あまり詳しく論及されたことはないようであるが、いわゆる「大航海時代」の開幕に口火を切ったポルトガルの海外進出は、そもそも水産資源の慢性的な不足に対処するための新たな漁場の開拓・拡大をひとつの大きな動機としていた。新大陸の漁場開拓に決定的な画期を与えたのはイギリス

(1) 川北稔『工業化の歴史的な前提：帝国とジェントルマン』（岩波書店、1983）1-81、特に36-46。R・G・ウィルキンソン『経済発展の生態学：貧困と進歩』（斎藤修・安元稔・西川俊作訳、筑摩書房、1975）145-152。中沢護人『鋼の時代』（岩波新書、1964）43-49。J. Williams, "English Mercantilism and Carolina Naval Stores, 1705-1776." (*The Journal of Southern History*, I, 1935) 169-185。F. Braudel, *Capitalism and Material Life, 1400-1800*. (Harper & Raw, 1973) 269。紫藤貞昭『自然科学史ノート：物質探求の思想と技術』（藤書房、1973）104-105。なお本章にかんしては、旧稿「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」（龍谷大学『社会科学研究年報』第20号、1990。以下「旧稿」と表記）も併せ参照されたい。

王やスペイン王の援助を受けたカボット父子のニュー・ファウンドランド（現カナダ東部海岸地域）探検であったが、それに先立ち、大西洋北西海域一帯の沖合には、すでにポルトガルの漁民たちが大挙して押し寄せていた。彼らが歴史書の中でとり上げられることが少ないのは、フランス北西部のブルターニュやノルマンディー、それにイギリス西部沿岸地域出身の漁民によって、まもない内に駆逐されてしまったからである。当時、キリスト教圏では肉食を制限・禁止する斎日（断食日・節食日）が1年の半分以上の日数を占め、いわゆる fish-day が多かったため、水産資源は一国の商業戦略上も決して軽んじることのできない重要商品であった。15～16世紀の内にバルト海の豊富なニシンが獲り尽くされて大きな問題になっていた、という事情もあった。それゆえ、ニュー・ファウンドランドやラブラドル、ニュー・イングランドの水産資源（特に鱈^{たら} cod 漁場）の開拓は、どの国にとっても焦眉の課題であった。この時期、大西洋の北西海域でヨーロッパ各国による漁場獲得競争がくり広げられたのは、いわば当然の推移であった⁽²⁾。やがてオランダやデンマーク、スウェーデンなどヨーロッパ各地から半定住の漁師たちが続々と押し寄せ、現在のカナダ沖で大がかりな活動をくり広げた。探検事業と同様、一般に当時の遠洋航海活動は数多くの危険を伴うものであったが、同時に、それは空前の利益も伴った。それゆえ、莫大な富を生み出した数々の航海活動（海賊行為と同等なものも多かった）は、エリザベス女王の時代 [1558年～1603年] に至って西インド諸島やアフリカ沿岸各地、それに北米大陸東北海域への定期的な航路の開設をよび起こし、遂には「大西洋貿易圏」が世界商業の中核舞台となる時代が到来した⁽³⁾。17世紀初頭における各種特許会社の設立や植民拠点の建設は、こうした状況の反映に外

(2) V.M.Godinho, “Création et dynamisme économique du monde atlantique, 1420-1670.” (*Annales, Economies, Sociétés, Civilizations*, V, 1950) 33. 拙稿「欧米社会における牛肉と肉商人：商品文化史的考察」（『市場史研究』第11号、1992）30-52.

(3) 池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制』（仮題、人文書院、1995）。拙稿「大西洋奴隷貿易圏とイギリス東インド会社」（浅羽良昌編著『経済史：西と東』泉文堂、1991）27-58.

ならない。ニュー・ファウンドランド漁業に関するエリザベス期の最も初期の記録の一例として、地理学者アンソニー・パークハーストがリチャード・ハクルートに宛てた書簡（1578年）が挙げられるが、それによれば、当時ニュー・ファウンドランドには100隻のスペイン船、150隻のフランス並びにブルターニュ船、50隻のポルトガル船が進出し、イギリス船もすでに50隻に達していたという。一方、1615年に書かれた『貿易増加論』なるパンフレットには、1400名に及ぶ船員の乗り組んだ15隻の船がグリーンランドで捕鯨業に従事し、アイスランドでの捕鯨業には120隻（2500名）、ニュー・ファウンドランド漁業には250隻（1500名）もの船団が送り出されていたと書かれている。ニュー・ファウンドランドに進出した船は、それぞれ「3万匹もの魚と5トンの鯨油を満載して帰港し、合計13万5000ポンドもの利益を上げた」と述べる資料も残されている。すでに1640年の時点で、ニュー・イングランド植民地からだけで実に30万匹の干魚 dry fish が輸出されていた。当時のイギリスの植民政策の進展を知るための第一級史料である『国家文書要覧』からの数値を挙げて更に言うとなれば、たとえばニュー・ファウンドランドにおける1680年のイギリス船の総トン数は9305トンに達していたことが判明するし、しかもそれはその後わずか100年足らずのあいだに、2万5630トンにまで達したことがわかる⁽⁴⁾。

当初は、ヨーロッパから進出した漁民たちが北米大陸に定住することは稀で、獲れた魚は時には生のままヨーロッパへと急ぎ持ち帰られた。しかし、やがて夏場には網を修理したり魚を塩漬・燻製にしたりするために、季節的ながら北米大陸東岸部各地の漁業拠点に定住する者が多くなった。当時ニュー・ファウンドランドの沿海部は、雑多な国籍の荒くれ漁師が雑居する「季節的野営地」

(4) J.E.Gillespie, *The Influence of Oversea Expansion on England to 1700*. (Octagon Books, 1974) 101-105. W.N.Sainsbury et al. (eds.), *Calendar of State Papers, Colonial Series, America and West Indies, 1677-1680*. (Kraus Reprint LTD, 1964) 643. W.B. Weedon, *Economic and Social History of New England, 1620-1789*. (Hillary House Publishers LTD, 1963) vol.1-141. U.S.Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1970*. (Washington, GPO, 1975) Series Z, 534-538.

となっていた⁽⁵⁾。北米大陸における毛皮取引は、こうした野営地に定住した漁師たちと、近隣に先住したアルゴンキン系のインディアンとの間の物々交換からはじまった。カナダ経済史の分野に偉大な実証研究の足跡を残したH・インニースが述べるように、新大陸での毛皮交易は「鱈漁の副産物として生まれた」⁽⁶⁾のである。やがて、夏が過ぎてもヨーロッパに帰還せず、半定住から完全な定住の生活に転換する者がふえてゆくと、ヨーロッパ出身の漁師たちは先住のインディアンたちが冬にはいずれも高価な毛皮の衣服をまとっていることに気づきはじめた。それは、母国ヨーロッパでは一般庶民が誰も容易には入手できるはずのない、ビーヴァーやキツネやオオジカ、それに見たこともない獣から得られた色あざやかなすばらしい毛皮ばかりであった。毛皮取引 Fur Trade は、漁師たちがヨーロッパ産の安物の金属細工やガラス玉、各種生活用品・工業製品・武器などを売りつけるのと交換にインディアンから毛皮を得るという取引であったため、Indian Trade とも呼称されることになった。

インディアンとの毛皮の取引にもっとも力を入れたのは、最初はオランダ人とフランス人で、中でも国王特許を持たないフランスの「もぐり商人」たちの活動は際立っていた。現カナダ東半部を中心としたヌーヴェル・フランスへの入植者で、大西洋の沿岸地域を離れ、毛皮を求めて森の奥へと入り込んでいったのが、「森の猟師 *coureurs de bois*」と呼ばれた一群の^{わな}罾猟師・毛皮商人たち

-
- (5) E.R.Wolf, *Europe and People without History*. (University of California Press, 1982) 160. J.H. Parry, *The Establishment of the European Hegemony, 1415-1715 : Trade and Exploration in the Age of the Renaissance*. (Harper & Row, 1966) 69.
- (6) H.Innis, *The Cod Fisheries : The History of an International Economy*. (University of Toronto Press, 1978) 53. 因みに、鱈漁の副産物として生まれたこの毛皮取引による富の蓄積が、今度は後年には木材業や各種加工業・商業の産業基盤を形成することになる。インニースは「ニュー・ファウンドランドの鱈漁こそは、新大陸における英国によるスペイン人放逐の最大のきっかけであった」とも述べている。なお、鱈と毛皮という重要商品いづれについても、イギリス系商人がフランス系商人よりも低価格を維持したことは、北米大陸部におけるイギリスの優位の確立に決定的な影響をもたらした。この点については、すでに注(1)にあげた旧稿の68-71ページでふれておいた。

であった。北米大陸での大々的な毛皮取引は、英国系のハドソン湾会社が設立（1670年）されたのを契機に本格化するのであるが、後にみるように、その企業活動にそもそもの予備的環境を準備したのは、彼ら「森の猟師」たち以外ならなかった。現アメリカ合衆国の西部フロンティアの歴史をつくり上げたのがカウボーイとインディアンであったとするなら、植民期におけるカナダ地域のフロンティアでは、毛皮猟師とインディアンとが主役だったということになる。新大陸の歴史を先住インディアンと白人植民帝国との相関としてとらえた場合、またすでに前号までにたどってきたような中世末期ヨーロッパにおける毛皮交易史の展開に鑑みた場合、毛皮を求めて新大陸に押し寄せた彼ら猟師の役割は、ひときわ大きな意義を担ったと思える。

「森の猟師」とは、元もとは主に現在のカナダ領内に入り込んだフランス系の毛皮商人の内、フランス王室の公式の開拓許可証（ケベックで発行）を持たなかった、いわば「ヤミ、もぐりの商人」、つまりは非合法の不法な渡航者たちのことである。もっとも、「不法」渡航者とはいっても、封建的な権威・権力が幅をきかせていた時代のことゆえ、ライセンスは大体においてまず富裕な有力商人に対してのみ与えられるのが通例であったから、ヌーヴェル・フランスへの渡航者は大部分が「もぐり商人」であった。

それはともあれ、彼ら「森の猟師」たちは遅くとも16世紀の後半期までに先住民たちとの間にかなり大がかりな規模で毛皮の取引を行いはじめ、それぞれ勝手に気の向くままに森の奥へとその活動圏を拡大していった。フランス語の「coureurs de bois」とは、元来語義的には「森を走る者 woods runners」ないしは「森の中の放浪者 Vagabonds of the forest」という意味を持っているが、歴史的にはまず何よりも、ワナを仕掛けて毛皮獣を捕獲する罾猟師 (trappers) を意味しており、また毛皮商人 (fur trader) を意味していた。毛皮を求めてセントローレンス河や五大湖の水系に沿って未知の森林へと分け入った彼らの姿は、カナダやアメリカ合衆国では、数多くの児童・大衆向けの冒険物語の中に描かれ語りつがれている。「北米開拓最初期の果敢なパイオニアは、外ならぬ彼ら毛皮猟師だった」という訳である。この猟師たちは、先住インディア

ンとの取引を重ねる内に、インディアンの言葉や森の中で生き抜いてゆくための色いろな生活の知恵を身につけていったが、有力インディアンの娘と結婚することによって「白いインディアン」となり、先住民の社会に完全に同化してしまう者も案外多かったようである。フランス系移民の数が少なかったこともあるが、陽気で大胆なラテン系民族の伝統が反映したといえるだろう。

森の奥地への探検に際しては、彼ら「白いインディアン」たちはペミカン (pemmican) と呼ばれる保存食を携えることが多かった。pemmican (または pemican) というのは、ある地方インディアンの方言で、「脂肪肉」とか「あぶら身」を意味する pimiy から派生した単語である。野牛の肉や鹿肉を乾燥させた上で脂肪・果汁などを加え、餅のように搗き固めた携帯食を意味している。ちょうど、今日でもテキサス辺りで土産物として売られ、ドッグフードとしても有名な Beef Jerky のようなものである。毛皮の運搬に関しては、カヌーで河川・湖沼を利用して運び、一度に2〜4パック（1パック=約40kg）を積み出すのが通例だった。4パックといえれば大体160kgに当たるが、これは猟師たちが味わった労苦に十分見合うだけの利益、つまりはイギリスとフランスとオランダの間にやがては激しい毛皮争奪戦争をひき起こす一因となるほどの空前の巨大な金額に相当した。

イギリス王室もフランスの王室も、北米へのイギリス系移民が増加する以前には、無益な対立を出来るだけ回避するために、毛皮の採取圏に関しては暗黙の内にも一定の「ナワバリ」を相互に認め合っていた⁽⁷⁾。しかし、気ままな猟師たちが、遠く離れた本国の役人がとり決めた境界線などを気に留めるはずはなく、河川の導いてくれるところがすなわち自分の「ナワバリ」であった。「けもの道」を見つけさえすれば簡単なワナを仕掛けるだけで驚くほど容易に大量の毛皮獣が獲れたため、狭いナワバリでは毛皮資源がすぐに枯渇してしまうという事情もあり、限定されたナワバリでの活動は不都合であった。彼ら畏猟師た

(7) A.J.Ray & D.B.Freeman, 'Give Us Good Measure': *An Economic Analysis of Relations between the Indians and the Hudson's Bay Company before 1763*. (University of Toronto Press, 1978) 30.

ちは毛布、やかん、火器、せっけん、安物の装飾品、鉄製品、ろうそく等々のさまざまなヨーロッパの製品をインディアンに売り渡し、自分の方は毛皮獣を捕獲してもらったりそれらの雑多な商品を毛皮と交換してもらったりしていた。近隣地域で毛皮獣が減少してしまうと、自分で更に奥地へと足を運んだり、他の地域のインディアンとも取引の範囲を広げるようインディアンの指導者に働きかけたりした。時には、足をふみ入れた先々で彼らはインディアンに色いろなヨーロッパ商品と共にキリスト教の教理体系などを紹介し、また飲酒の習慣をほとんど持たなかったインディアンの間にブランデーやラム酒のようなアルコール類を広めていった。飲酒を厳しく戒めていたカトリックのフランス当局にとっては猟師たちによるアルコール売買は不届き千万な行いに感じられたようで、たびたび禁止令が出されている。

猟師たちのナワバリ争いが次第に過熱すると、先住インディアン相互の間にも争いが絶えないようになった。というのは、元もと敵対していたインディアン同士の狩猟場争いを助長して漁夫の利を得る猟師が現われたり、インディアンを奴隷にして今のカロライナ地方や西インド諸島のプランテーションに売り飛ばす悪らつな猟師が現われたりしたからである。この点、毛皮取引は、北米大陸において先住インディアンを奴隷化した最も初期の産業体制という性格を持っていた。後述するシベリアやアリューシャン列島のフロンティアにおけるのと同様、ヌーヴェル・フランスのフロンティアでも、毛皮商人は奴隷商人という一面を有していた訳であり、毛皮取引には広範な地域で先住民の奴隷化が伴ったのである。インディアンたちが英仏ないしは英蘭両国の勢力争いに巻き込まれた時には、インディアン社会が蒙る厄災はとりわけ甚大なものとなった。植民期のカナダにおけるインディアン奴隷制については、内外とも今のところまとまった研究は皆無に近いが、アメリカ合衆国や中南米の諸国の場合と同じように、カナダ建国の歴史においても、やはり当初より先住民の掃滅が展開した史実が見落とされてはならないだろう。1990年代に入っても、カナダと合衆国の国境地帯に居住するモホーク・インディアンなどは、軍や警察と銃撃戦を交えてまで「独立」を主張しており、現在でも「モホーク・ネイション」への

入国に際しては「入国ビザ」が必要である⁽⁸⁾。

それはともかく、毛皮のもたらす莫大な利益を封建君主たちがいつまでも野放しにしておく筈はなく、以上紹介してきた「白いインディアン」たちの活動は、やがて本国政府の重商主義的規制強化によって統制されてゆくことになる。そうした規制は、本国貴族や政府当局のおスミ付きをもらった特権商人を主体とする会社組織による取引権の掌握という形で具体化されることになる。ここで次に、ヌーヴェル・フランスの毛皮資源開発のために1670年に設立され、20世紀末の今も活動をつづける史上最長命の株式会社「ハドソン湾会社」の歴史に目を向けなくてはならないだろう。

2 ハドソン湾会社の創設

ヨーロッパとアジアおよび新大陸との交易が未曾有の規模で拡大すると、貿易や金融をはじめとする経済活動は、単独の個人の出資や従来広く見られたような家族的な経営だけでは成り立たなくなり、商人や貴族、金融業者は資本を共同で出し合い、事業規模の拡大、遠隔地貿易に伴う危険の分散等をはかるようになる。そうした時代的な要請の中から株式会社という「制度的革新」が生み出され、大西洋を越えた、あるいはインド洋に連なったグローバルな規模の取引が実現されはじめた。この株式会社組織の発生史については、内外ともにすでに数多くの研究がある。しかし、ここで挙げるハドソン湾会社に関しては2編の経営史的論稿が見られるだけで、毛皮取引に着目して Indian Trade と

(8) 「森の猟師」については、Ray & Freeman, *ibid.*, 29-36, et passim. W.B.Munro, "The coureurs de bois." (Massachusetts Historical Society, *Proceedings* 57, 1924). および I.A.Johnson, *The Michigan Fur Trade*. (Michigan Historical Commission, 1919) ch.1. 毛皮猟師による先住民の奴隷化については A.W.Lauber, *Indian Slavery in Colonial Times within the Present Limits of the United States*. (AMS Press, 1969) 75-78. カナダでの奴隷制の展開については、さしあたり W.R.Riddell, "Notes on the Slave in Nouvell-France." (*Journal of Negro History*, 8, 3, 1923) 316-330. なおモホークの武装闘争にかんする記事は「Bart」(1992年11月9日号)に収録されている。

してのその活動の実体を分析した文献は、未だ皆無に等しい現状である⁽¹⁾。東インド会社および王立アフリカ会社の資本額と合算した場合、ハドソン湾会社の資本額は17世紀末のイギリスに存在していた140社の企業の総資本額（425万ポンド）の50%強に相当したという点、また同社は今では事業内容を百貨店経営主体の小売専門分野とオークション業に縮小したとはいえ、創設以来今日に至るまで320年以上にわたって活動を継続している史上最長命の株式会社であるという点に鑑みるならば、そして更にハドソン湾会社はかつて史上最大規模の土地を英国王によって下付された会社であったという事実気づくならば、以上のような研究史上の空白は是非とも埋めておかななくてはならない。

史上最大・最長命の毛皮会社として誕生したこのハドソン湾会社の歴史は、2人のフランス人冒険商人の「岩窟王物語」からはじまるものと伝えられている。毛皮交易がつくりあげた巨大企業の起源をたどるため、以下にその「物語」の概要を記しておきたい。

1618年（または21年）のある暑い夏の日、フランス東部マルヌ河畔にあるシ

(1) 株式会社発生の「制度的革新」については、D.C.North & R.P.Thomas, "An Economic Theory of the Growth of the Western World." (*The Economic History Review*, 2nd series, 22, 1970) 1-17. イギリス東インド会社については、大塚久雄『株式会社発発生史論』（岩波書店「大塚久雄著作集」第1巻、1969）437-521, 西村孝夫『イギリス東インド会社史論』（啓文社、1966）。その他、浅田實『商業革命と東インド貿易』（法律文化社、1984）、同『東インド会社：巨大商業資本の盛衰』（講談社現代新書、1989）。も参照が必要である。ハドソン湾会社についての経営史的論稿としては、山田勝『近代イギリス貿易経営史』（創成社、1985）第5章と、上田光人「イギリス初期株式会社の考察：ハドソン湾会社の場合」（『中京商学論集』第20巻第2号、1973）1-28。の二編を挙げることができる。海外では、北米での毛皮交易史ないしハドソン湾会社の活動については H.A.Innis, *The Fur Trade in Canada: An Introduction to Canadian Economic History*. (First pub. 1930). が「ステイブル理論」に基づいてイギリス経済史の一部としての研究を提唱し、1950年代に E.E.Rich が一連の文化史的研究を公表して先住インディアンとハドソン湾会社の経済活動の係わりにはじめて論及して大きな反響を与えた。近年に至ってトロント大学の若手研究者などにより同社の会計帳簿や各交易所の取引目録などが数量史的に比較・分析され、ハドソン湾会社による毛皮取引の意義が改めて強調されはじめている。詳細については、Ray & Freeman, *op.cit.*, 3-8.

ャルリーという町に、メダール・シュアール・グロゼイエー何某 (Medard Chouart, Sieur de Groseilliers) という、ひとりの男が生まれた。少年時代をフランスの片田舎で過ごした後、この冒険心にあふれた男は二十歳代の前半の内に雄飛を求めてカナダの新天地ヌーヴェル・フランスへと渡った。1630年頃のことと伝えられている。54年には、彼は当時フランス人に対しては概して敵対的と言われたイロクォイ (イロクォワ) 諸族の集落の間をぬって他の毛皮商人と共にハドソン湾周辺への探検を敢行し、まだほとんど確かな概観さえ知られていなかった前人未踏のこの地域の地形や毛皮獣の棲息状況、そしてインディアン集落の分布などについて、貴重な情報を次つぎと集めていった。折しもその頃、特に1640年代後半期以降には、カナダ東部ではフランス人と友好的な取引関係にあったヒューロン・インディアンがイギリス人・オランダ人と同盟していたイロクォイ連合軍によって放逐され、フランス人入植者はハドソン湾地方にまで入り込んで毛皮圏を拡大せざるを得ない状況に追い込まれていた。グロゼイエーの2年間にわたる果敢な探検は、豊富な情報と莫大な量の毛皮とをもたらして、危機に頻していたフランス領植民地に起死回生の大きな希望を与えることになった。ヌーヴェル・フランスの拠点ケベックへと帰還したグロゼイエーは入植者たちに歓呼の叫びをもって迎え入れられ、彼は一躍その名を高めた。

59年夏にはグロゼイエーはさらに北方の地域を探検し、その後スペリオール湖南岸 (チェカメゴン湾) で越冬してから西進を重ねてスー・インディアンと接触、樹木に恵まれないツンドラ地帯を生活圏とするこの先住民たちが石炭で火をおこしているのを目撃して大いに驚いた旨などを書き残している。やがてスペリオール湖を北へ渡ってそこでクリー・インディアンと生活を共にし、グロゼイエーは典型的な *coureur de bois* となっていく。彼の取引方法はきわめて大がかりで、毛皮資源に恵まれた地域を見出すや、その地域一帯の商業的開発のために、例えば100隻ものカヌーで組織された一種の「商船団」をハドソン湾から送り込ませていた。この点からも、当時、毛皮のもたらす利益がいかに大きなものであったかが窺える。

ほぼ1年の後、グロゼイエーは義弟のラディソンと共にやはり莫大な量の毛皮をカヌーに満載してケベックに帰還した。ある研究者によれば、この時彼らが持ち帰った毛皮は、当時としては格段の破格値に相当する20万リーヴル（11万5000ドル）分もの数量であったという。しかし、ケベックでグロゼイエーとラディソンが受け取ったのはわずか2万ドルの報酬であった。それどころか、二人は「開拓ライセンスを持たない密猟者である」との理由で拘禁され、自分たちの稼ぎをすべて横取りされてしまう。その背景には、前々から二人が毛皮取引の利益配分や毛皮に対する税金の問題をめぐってケベック政府当局者と事あるごとにいさかいを起こし、その恨みを買っていたという事情も絡んだようである。しかも、グロゼイエーが捕えられてからまもなく、ヌーヴェル・フランスで活動する民間毛皮会社はことごとく毛皮取引の特許を取り消され、この地はフランス国王の直轄地として王領となることが決められる、という事態も重なっていた。本国官僚は、毛皮取引の可能性にある程度のメドがつくや否や、国王権力による毛皮独占をはかったのである。

拘禁の憂き目にあったグロゼイエーは復讐を誓い、ここに毛皮界の「岩窟王」が誕生することになった。63年、イロクォイ・インディアン征討のためにフランス本国が2万名余りの大軍を派遣してヌーヴェル・フランス東部一帯を戦乱状況に陥れた時、彼は動乱に乗じて英領ボストンへと逃亡、イギリス人入植者たちにカナダ地域の信じられぬほど豊富な毛皮資源の存在について吹聴した。最初の内は、みすぼらしく落ちぶれた一介のフランス人商人の夢物語のような話に半信半疑であったものの、商魂たくましいボストン商人たちがグロゼイエーの情報の重要性に気づかない筈はなかった。しかもボストン商人は金属貨幣の慢性的な不足に苦しんでおり、トウモロコシとならぶ代表的な商品貨幣であったビーヴァー皮への需要はきわめて高かった⁽²⁾。早速何人かの熱心な支持者が現われ、グロゼイエーはひとまずイギリス本国へ渡って国王チャールズ2世

(2) 当時、代用貨幣としてのビーヴァー皮がいかに重要な地位を占めたかについては、浅羽良昌『アメリカ植民地貨幣史論』（大阪府立大学経済研究叢書、1991）105-130。

の後援を得るようにと助言された。そこで65年、彼はラディソンと共に大西洋を渡り、イギリスへと向かうことになる。そのイギリスは、ちょうど王立アフリカ貿易会社が設立された時代にあり、大西洋の南のルートへの進出が海賊行為や奴隷貿易を基盤に活況を呈しはじめたところであった。

ヴァージニアにつづいて現合衆国領の英領南部植民地の要^{みなめ}となったカロライナへの植民も行われ(1663年特許下付、70年植民開始)、またオランダ領ニュー・アムステルダムは英領ニュー・ヨークとなって(1664年)毛皮取引をはじめとする一大商業センターとしてイギリス系移民の急増を呼び起こしていた。もし、カナダ地域もまたイギリスの勢力範囲に取り込むことができたなら、イギリスは北米においてスペイン、オランダに次いで仇敵フランスの勢力をも一挙に凌げることになる筈であった。チャールズ2世は二人のフランス商人に巨額の援助費を約束し、68年にグロゼイエーとラディソンは再びカナダへと向かった。ラディソンは事情あって途中で一旦探検隊から脱落するが、グロゼイエーの方はハドソン湾南東端のジェイムズ湾に流れ込むラパート河の流域にまで至り、翌69年末に高価な毛皮を山ほど積んで持ち帰ることになった。ラディソンと再び合流したグロゼイエーがノンサッチ号と名づけられた大型帆船で帰英するや、その莫大な資源価値に気づいた国王はハドソン湾での毛皮取引の独占を実現すべく、70年にハドソン湾会社の設立を決定することになった。ここにおいて、毛皮を横取りされた二人のフランス商人の怨念が、イギリス王室に思わぬ莫大な利益をもたらす結果となった。

ところで、グロゼイエーと共にハドソン湾会社創設のきっかけをつくることになったラディソン(Radisson, Pierre Esprit)は、1636年頃にフランスで生まれ、少年時代の内にヌーヴェル・フランスに移住していた人物である。彼自身大部の日記を残し、またイエズス会の教会記録などにも頻繁に名が出てくるため、グロゼイエー以上に詳細な経歴が伝えられている。「ミシシッピ河上流にはじめて足を踏み入れた白人は自分である」といったような、今日では「デッチ上げ」ないしは勝手な「思い込み」とみなされている記述も多いため、ラディソンの日記をそのまま無批判に鵜呑みにする訳にはゆかないものの、その膨

大な記録は、当時のヌーヴェル・フランスの情況の輪郭やハドソン湾会社の設立事情の概要を知るには、やはり欠かせない史料となっている。その日記によると、ラディソンはグロゼイエーより10年ほど遅れてカナダに渡り、毛皮獣の捕獲に携わりはじめたようである。51年5月、彼は狩りの最中にモホーク・インディアンに捕えられ、老酋長の養子となってインディアン社会の中で暮らし始める。彼の場合、まさに「白いインディアン」としての青年時代を送るのである。もっとも、そこでの生活にははじめなかったようで、2年後には彼はあるアルゴンキン系インディアンと共に三人のモホークを殺害して逃亡を試みている。この時には、再び捕えられて腰が砕けるほど徹底的に鞭打たれ、危うく命を奪われる瀬戸際にまで立たされたようである。その後どうにか許しを得てモホークの一員としての生活に戻るが、53年10月には再び脱走。今度はオランダ人の砦であったフォート・オレンジ（現オルバニー）へと身を寄せ、そこからニュー・ヨークのマンハッタン島へと向かっている。54年の初春には、最初に彼がモホークに捕えられたスリー・リヴァーズのほとりへと帰り着く。そしてその折、姉がグロゼイエーと結婚していたことをはじめて知り、初対面ながら互いにたちまち意気投合、先に述べた二人の果敢な毛皮探索の探検がはまったのである。

ハドソン湾会社設立後には、グロゼイエーもラディソンも共に75年まで同社の重職に雇われたが、やはり異邦人の間では居心地が悪いのか、両名ともフランスへの帰国を望みはじめている。グロゼイエーの方は巨大な財産を築き上げた後、84年にフランスから再度カナダへと渡り、そこで優雅な余生を送って96年頃に世を去ったと言われる。ラディソンの方は、81年にフランス当局の援助の下にやはりフランスからカナダへと移るが、植民地の横柄な官僚たちとは全く折り合うことが出来ず、84年には再びハドソン湾会社に入社してイギリス人のためにフランス人から2万枚もの毛皮を略取するのに手を貸したりしている。彼の場合、望郷の念や愛国心よりは母国人に対する憎しみの方が遙かに強かった訳で、結局は87年に至りイギリスに帰化している⁹⁾。

以上が、二人の「岩窟王」を中心として展開したハドソン湾会社設立の概要である。フランス人同士の内紛に乗じて「漁夫の利」を得る形で設立された会社であるが、経営の体制としては、利益配当のあり方やメンバー相互の同質的構成など、なかなか近代的と言える特徴を具備していた。1670年5月2日に特許を与えられて以後、2世紀にわたり同社のメンバーないしはその代理人たちはハドソン海峡から太平洋岸に至る広大な地域を縦横に探検し、広範な交易所網を發展させて今日のカナダ西部地域における英国人の支配的地位を確立するのに大いに貢献することになった。特許は、チャールズ2世の従兄弟にあたるリュパート卿の榮譽に因んで命名されたいわゆる「リュパート所領」(＝ハドソン湾水系に隣接する地域一帯の総称で、ハドソン湾会社に経営が一任された同社社領)の創設を促したが、これは一個の株式会社と与えられた土地の面積としては、空前にして絶後の、廣大極まりない広さを持つものであった。これは今日の地名でいうと、ラブラドル半島の西方、ケベック、オンタリオ両州すなわちローレンシア楯状地一帯からマニトバ、サスカチュワン、アルバータの諸州、そして更にはノース・ウェスト・テリトリー南西部の一部を含む広大な地域にわたるもので、今日のカナダ全域をほぼ包摂していた。同地一帯の統治を委任されたハドソン湾会社は、この地への入植推進と植民地経営を請け負う見返りとして、毛皮をはじめとして同地全域の各種資源の独占的開発権を認められることになった。発起人には当時の枢機卿、王族、有力豪商が名を連ね、筆頭理事にはまずリュパート卿が、次いでヨーク公(後のジェームズ2世)、そして更にジョン・チャーチル(後のマルバラ公)が選ばれた。創設資本金1万500ポンドは、20年後には3倍の3万1500ポンドとなり、1720年にはそのまた3倍の9万4500ポンドに達した。1710年代には、フランス側からアントワヌ・クロ

(3) 以上、グロゼイエーとラディソンについては、H.C.Champbell, "Radisson and Groseilliers: Problems in Early Western History." (*American Historical Review*, 1, 1896) 226-237. G.Bryce, *The Remarkable History of the Hudson's Bay Company*. (Bart Franklin, 1968) 3-5, 33-55. および A.T.Adams, *The Explorations of Pierre Esprit Radisson*. (Ross and Haines, 1961).

ーザなど商才に長けた毛皮商人が輩出してセントローレンス河口から五大湖南方に至る地域の毛皮取引を独占し、次項に述べるいわゆる「セントローレンス商業帝国」を現出させたが、しかしそれも一時のことで、18世紀の20年代以降には、カナダ地域での毛皮取引はハドソン湾会社の独壇場となってゆくのである。

カナダ地域での毛皮取引において英国系のハドソン湾会社が圧倒的な優位を保ち、また植民期の北米大陸一円において英国系の毛皮商人が徐々に優位を保った理由としては、主に次の諸点を挙げることができる⁽⁴⁾。

- (1) 1722年にニューヨーク州オウセイジに英国系入植者によって砦が建設されて、ヌーヴェル・フランスとミシシッピ周辺を中心に開拓されていたルイジアナとが分断され、フランス勢力の連携が保てなかったこと。
- (2) 当時最も有力であったイロクォイ勢力が1744年にオハイオ河の北方全域をイギリス人に譲渡し、その地域での毛皮獣の捕獲に際して英国系商人への優先的協力を申し出たこと。このことはオランダ系入植者が開拓した交易ルートをもそのままイギリス人が利用する機会をももたらし、後発の英国系入植者に大きな利点となった。折しも、イロクォイ勢力が北方に毛皮圏を拡大しようとする動きに出ていることは、英国系のハドソン湾会社にとりきわめて有利な環境を提供した。
- (3) 新大陸での毛皮取引においては、「ストラウド」と呼ばれた英国製ラシャ製品と英領西インド産ラム酒とが最も重要な交換商品であったが、フランスはこの両商品の供給に関しては全く英国に対抗することが出来ず、英国との価格切り下げ競争に敗北を喫したこと。フランス本国はさまざまな善後策を講じて各種羊毛製品の「ストラウド」への転換、ブランデー醸造所のラム酒工場への改造などを図りはするが、生産工程の未成熟、運送費のコスト高、商業経営の未熟さ、等々の理由のために、結局は毛皮価格の切り下げの点では英国に太刀打ちできなくなる⁽⁵⁾。

(4) 英国優位の一般的な要因については、前出の旧稿（70ページ）を参照されたい。

(5) T.E.Norton, *The Fur Trade in Colonial New York : 1686-1776*. (The University of Wisconsin Press, 1974). 12, 14, 90-91. Ray & Freeman, *op.cit.*, 138.

(4) 「英仏の雌雄を決する戦い」「帝国（確立）のための戦争」と言われたフレンチ・アンド・インディアン戦争（1754年～63年）での勝利によって英国の優位が決定的となり、カナダ地域における英国系入植者の活動も一挙に安定化したこと。特に、この戦争の結果締結されたパリ条約でオハイオ流域の毛皮圏がごとくイギリス側に譲渡されたことは、オハイオが「北米における白人勢力のパワーゲームのシーソーの支点」と喩えられただけに、きわめて重大な意味を持っていた⁽⁶⁾。

以上の内、長期にわたって最も基本的な要因となったのは(3)の英領と仏領の間における毛皮をはじめとした各種取引商品の価格差の問題である。すでに旧稿で詳しく論及したが、英領オルバニーの商人が仏領モントリオールの商人の約2分の1ないし4分の1の価格で毛皮の取引が出来たこと、そしてカナダへの入植者や近隣インディアンに対して相対的に低水準の価格で英国系商人が毛皮や諸々の商品を販売し得たことは、「カナダにおける毛皮取引を牛耳り、ひいては北米大陸を支配することができた最大のキィ・ファクターのひとつ」と断言できる重要事であった。安価商品の供給を英国系商人が維持している限り、インディアンたちは毛皮を仏領デトロイトやナイアガラにではなく、英領のニューヨーク、それにオルバニーなどに持ち込もうとした。そして、「旧フランス帝国の生命線」(R・W・V・オルスタイン)であったデトロイトやナイアガラが繁栄の基盤を失いはじめた時、北米地域におけるフランスの植民地経営は事実上その骨格を喪失したのである⁽⁷⁾。しかも、ある史家によれば「18世紀の英国人にとっては、すべてのことがケベック問題に結びついていた」といわれる⁽⁸⁾のであるから、フレンチ・アンド・インディアン戦争によってイギリス側が勝利

(6) Norton, *op.cit.*, 5. Lauber, *op.cit.*, 93-94. 今津晃『アメリカ大陸の明暗』(河出書房「世界の歴史」17, 1969) 139-142.

(7) Norton, *op.cit.*, 12. R.W.V.Alstyne, *The Rising American Empire*. (Blackwell & Mott LTD., 1960) 72.

(8) P.Lawson, "A Perspective on British History and the Treatment of Quebec." (*Journal of Historical Sociology*, 3, 3, 1990) 268.

を得たことは、現カナダ東部地域における政治・経済・軍事の各分野でのイギリスの決定的な優位を意味したのである。この優位が確定すると共に毛皮取引におけるハドソン湾会社の独占体制も整い、年50%以上の配当が着実に行われていったが、時には「年2000%」という途方もない高配当も巷間では噂されるようになった。

なお、ハドソン湾会社の社員やヨーロッパから渡来した毛皮猟師とインディアンとの取引——Indian Trade——に係わっては、是非ともコメントしておかなくてはならない問題がある。それは、この取引における「非市場的要素」の存在である。

改めて強調するまでもなく、北米大陸での毛皮取引の興隆は前号で論及した「ユーラシア毛皮交易圏」の展開の直接の延長線上に位置づけられるべきものであるが、北米においてヨーロッパ人の渡来直後から毛皮取引が盛んとなったのは、中世ヨーロッパにおける毛皮資源の広範な地域での枯渇があり、また何よりも「新世界」での定住植民の基礎づけの必要があったからである。16世紀末葉以後、ビーヴァーの毛皮をフェルトとして利用したビーヴァー帽やビーヴァー製のコートに着用がヨーロッパにおいて大流行しはじめたといったヨーロッパ各地における社会的な要因も働いていた。そうした時代的な趨勢の中で、ロンドンやモスクワ、ライプチヒ、パリ、アムステルダムなどが中核的毛皮市場として急速に拡大したといった事情もあった。フランスでは1588年までに新大陸の毛皮は莫大な利益もたらすことが評判となって国王に取引特許を嘆願する者が相次ぎ、「要するに、ビーヴァーがあらゆるものを産み出す」などとまで言われていた⁽⁹⁾。そうした事情のため、ヨーロッパ市場を目当てに毛皮を運ぶことは、大きな金銭的利益に直結していた。

しかし、それらはいずれもあくまでもヨーロッパ側の要因にしか過ぎず、近年の研究では、そうしたヨーロッパ側の事情や要因を取り上げるだけでは、実

(9) Ray & Freeman, *op.cit.*, 19-21.

は植民地時代の北米の毛皮取引の全体像は理解できないといわれて来ている。というのは、Indian Trade の一方の当事者であったインディアンの側にとっては、新来の白人との「取引」は、第一には友誼の証を得るための政治的な（あるいは儀礼的な）行為であり、交換だとか売買といった経済学で通常用いている概念は直接には当てはまらないからである。インディアンにとっては、交換によって財を得ることが目的なのではなく、友好関係や共同体内での名誉を得ることにこそ、交換以上の絶対的な価値があった。たとえば、ヨーロッパの商人との間で毛皮と「交換」したやかんは、やかんとしてよりもばらばらに細分して飾り物や矢尻として利用された。つまりは利子や利得を得ることは第一義の問題なのではなく、自己の特異性や有能ぶりを誇示することによって、自分が所属する村や集落の中で一定の名誉を獲得し、またヨーロッパ人との間に信頼に足る友好関係を創出して維持することこそが、第一義の目的なのであった。

このことを理解するには、文化人類学などで未開経済を分析する際のひとつのキ概念となっている「贈与」「贈答」「互酬」だとか「ポトラッチ」、それに K・ポランニーが言う「交易港」という概念などに目を向けておく必要がある。「贈与」の理論や「交易港」の概念を盛り込んで植民期アメリカの商業史・経済史を一般的に論じるにはここでは詳しく論及する余裕はないが、ただ、アフリカでの奴隷貿易において「商品オンス（貿易オンス）」という特殊な単位が機能したのと全く同様に、北米インディアンとヨーロッパ商人の間の毛皮取引においては made beaver (MB) と通称された計算単位が基礎となり、また交易に先立つ贈り物の交換が必ず存在していた、という史実を紹介しておきたい。そうした一種の「贈与・贈答システム」(贈与物品の代表格は Puc'ca'tin'ash'a'win と呼ばれた毛皮である) や計算単位、それに壁に穴をあけたりする象徴的な数々の儀式を媒体として、先住インディアンはヨーロッパの「商人」と接触し「交易」したのである。逆に言えば、インディアン集落の近隣に設置された各地の毛皮交易所や内陸での毛皮の獲得は、むしろインディアンとの間での「非市場的」ないしは「半経済的」な接触にこそ基礎を置いていたのであ

る⁽¹⁰⁾。

3 セント・ローレンス商業帝国

ところで、フレンチ・アンド・インディアン戦争での敗北によって、フランス勢力が北米から駆逐されたとはいっても、それまでにフランス人猟師たちが開発した毛皮資源は、絶対量としては未曾有の莫大な数量に達していた。フランス系の猟師や入植者たちは、イギリス人との北米での植民地争奪競争においては結果的に敗北を喫したが、彼らによっておよそ2世紀の間にわたり先導された毛皮取引は、すでにそれなりに著しい展開を見せていたのである。早くも1603年、アンリ4世がカナダの毛皮資源開発を植民帝国建設の要と認識して積極的な開拓政策を推進しようとして動いていたことなどもあって、特にフランスとイギリス、オランダとの国家的なレベルでの対立が17世紀の初頭より顕在化していた⁽¹¹⁾。

フランス人猟師や宣教師たちが最初にカナダの地に足をふみ入れた当初は、モントリオールやスリーリヴァーズの近隣で年に一度開かれる大市 Fair にインディアンたちがビーヴァーやキツネやテンの毛皮を個別に持ち込むていどであったが、猟師たちの活動範囲が五大湖周辺地域にまで達するようになると、ナイアガラ、デトロイト、ミシリマキノー、サウル・サン・マリー、ヴァンセンヌ、サン・ジョゼクス、ラ・バイエなど各地に交易所が設置され、定期的な

(10) Ray & Freeman, *Ibid.*, 52-62. E.E.Rich, "Trade Habits and Economic Motivation Among the Indians of North America." (*Canadian Journal of Economics and Political Science*, 26, 1960) 35-53. 玉野井芳郎『市場志向からの脱出』(ミネルヴァ書房、1979)。K・ポランニー『人間の経済：市場社会の虚構性』(玉野井芳郎ほか訳、岩波現代選書、1980)。徳島達朗『奴隷貿易と産業革命』(杉山書店、1986)。なお、本文では引用しなかったが、ハドソン湾会社の歴史については、H.G.Selfridge, *The Romance of Commerce*. (London & New York, 1923)。や E.E.Rich, *Hudson's Bay Company: 1670-1870*. (Macmillan, 1961)。も参照されたい。前者は毛皮取引にかかわる文化的なトピックを幾つか紹介しており、後者はハドソン湾会社の活動の歴史をイギリス帝国史の枠組みの中に位置づけようとしている。

(11) P.C.Phillips, *The Fur Trade*. (University of Oklahoma Press, 1961) vol.1.

大量の毛皮が持ち込まれるようになった。そこからヨーロッパにまで運ばれた上質の毛皮に600倍～700倍もの値がつくことがわかると、各交易所には毛皮商人が殺到する事態となり、ヌーヴェル・フランスは一挙に発展の兆しをみせるに至った⁽²⁾。その発展は当初セント・ローレンス河の流通網を支配することによって築かれたもので、これを基盤にヌーヴェル・フランス一帯に形成されたフランス系入植者の社会・経済体制を、カナダ経済史の研究家の間では「セント・ローレンス商業帝国」と呼び習わしている。セント・ローレンス河をいわば骨格とし、五大湖からハドソン湾周辺の一帯を包含した地域のことであるが、広義には、ミシシッピ並びにその支流の毛皮圏（仏領ルイジアナ毛皮圏）にも連結してメキシコ湾にまで連なった広大な地域の「毛皮帝国」、すなわち「セント・ローレンス＝ミシシッピ毛皮帝国」と概念して差しつかえはない。ちょうど、英領13州植民地を北と西から取り囲むように拡がった、フランス人の勢力圏である。この「帝国」の起源は、カナダ史関係の書物では1608年のサムエル・ド・シャンプラン [1567年～1635年] によるケベック建設にはじまるとされるのが通例であるが、そのシャンプランが常にモント何某をはじめとした多数の毛皮商人や罽獵師を伴って植民活動を行っていたことは、この「帝国」の性格を象徴している。歴史に名を残したのはヌーヴェル・フランス初代総督に任命された「政治家」シャンプランであったが、実質的にこの「帝国」建設の道を切り拓いたのは、毛皮を求めてこの地に入り込んでいた何百人もの無名の獵師たちであった。

産業革命を先導した18～19世紀における大英帝国の発展が余りにも極端に巨大なものであったために、オランダやフランスの植民活動は（特にアメリカ史に関しては）影が薄かったかのように扱われることが多いが、経済の規模としては、中世までの社会には決してみられない非常に大規模な膨張が伴っていたという史実は、常に研究家の意識の中に織り込まれておく必要がある。余りにも桁外れの巨額な黒字は巨額の黒字をありきたりな利益であるかのように錯

(2) Johnson, *op.cit.*, 1-21.

覚させる。「セント・ローレンス商業帝国」からフランス商人によって運び出された毛皮は、断片的な数回の販売記録を挙げるだけでも想像を絶する莫大なものであったとも言われるのであり、例えばフランスにおけるブランデー生産の急増やボルドー産ワインの輸出の隆昌もこの「毛皮帝国」の発展と密接に結びついていたこと（後述）などを考えてみると、その経済的な波及効果や社会的な影響の大きさが十分に推察できる。一時は「神がカインに与え給うた不毛の大地」⁽³⁾といわれはしたものの、この「帝国」の領内は北米でも屈指の豊富な毛皮資源に恵まれた環境にあり、ビーヴァー、アライグマ、ミンク、テン、カワウソ、ジャコウネズミ、キツネ等々高価な毛皮を纏った獣が無尽蔵とも思えるほど多数棲息していた。黒テンを求めて怒濤の勢いでシベリアを開拓したコサックの役割を、この「帝国」では「森の猟師」が果たした。

この「帝国」の建設が王室による国家的プロジェクトとして推進されはじめると、政府当局は毛皮取引の独占的支配をはかるため、ヌーヴェル・フランス会社（1626年設立）、百人組合（1628年）、西インド会社（1664年）、等々の特許企業に毛皮取引のライセンスを下付した⁽⁴⁾。時の経過と共に小規模な交易所 trading post は軍隊の警備する砦 fort へと発展し、交易の規則や開拓ルートも整備されていった。「帝国」の支配部ではフランス国王を頂点にカトリック伝道師と本国派遣の植民地官僚が最上層部を形成し、その下に百人組合、西インド会社等の特権商人が控えて、個々の植民者ににらみをきかせようとしていた。なかでも「旧体制」の秩序を移植するべく熱狂的な布教活動に専心していたカトリック支配層の影響は大きく、広大な「帝国」の領土の4分の1を教会が所有した。猟師や探検家、上下さまざまな階層の入植者、それにキリスト教を知らない先住インディアンなど、「カインの地に住む不幸な輩」をキリスト教の天国に行かせてやることで、やがては財産や土地は教会に転がり込む仕組であった。

被支配層となった植民者たちの内、ケベック当局の発行する開拓ライセンス

(3) 富田虎男・清水透編集『「他者」との遭遇』（歴史学研究会編「南北アメリカの500年」第1巻、1992）136。

(4) 宮本又次『フランス経済史概説』（有斐閣、1942）181-183。

を持たずにカナダ内陸の森林地帯に分け入り、やがてはインディアン奴隷の売買やアルコール販売などにも手を染めたりしながら草創期「帝国」の基礎を築いていったのが「白いインディアン」となった「森の猟師」たちであったことについては、すでに旧稿でも本章冒頭でも論述した。「セント・ローレンス商業帝国」は、支配の最底辺にインディアン奴隷を生み出すことで確立したが、当初、基本的には白人猟師にとっての毛皮の交易相手、ないしは交易中継者の地位にあった先住民は、特に相次ぐ戦争の時期に俘虜として奴隷化され、あるいはまた奴隷商人と化した猟師に誘拐され売られることによって、新来の移住者たちがつくり上げていった帝國的支配の最下層部に押し込まれたのである。1728年にはインディアン奴隷への課税法が制定されて奴隷一人当たりにつき5リーヴルの税が課され、教会・病院等、植民地経営のための社会資本の整備に回された。折しも、フランス本国では1608年から1740年の間に奴隷制に論及した書物が数多く著されたが、多くは古代や中世に関するもので、当時植民地とアフリカをとり結んで盛んに行われていた黒人奴隷貿易や現下のインディアン奴隷化問題については、公には余り正面きった論議はなされなかった。新大陸における奴隷制度や奴隷貿易への関心がフランスで高まるのは、一部モラリストの著述が一種の流行となる18世紀も後半に至ってからのことであった⁽⁵⁾。

もっともフロンティアの最前線では、「高貴なる野蛮人」と良好な関係を保持する努力は常に払われていた。わずかな人数で森の中へと分け入った猟師たちは、インディアンを奴隷化するよりもむしろ、先にラディソンの経歴の項目でふれた如く、反対に自分の方が囚われの身となることも決して稀ではなかった。そのため、たとえ表面上のことではあっても基本的には先住民に対して友好的な姿勢を保持することはどうしても必要であった。狩猟の技術に長け、付近の事情にも詳しい先住民との協力関係は、土地奪取を第一義の目的とするのでない段階では、何よりも重要なことであった。強勢を誇ったイロクォイ諸族との

(5) E.D. Seeber, *Anti-Slavery Opinion in France during the Second Half of the Eighteenth Century*. (Burt Franklin, 1971) 13, 47-60.

対立が顕在化するまでは、友好的な姿勢の堅持や懐柔策は「帝国」の基本路線であった。

その基本路線の崩壊は、北米東北部海岸地域でビーヴァーをはじめとした毛皮獣が激減し、また、北米植民地経営の重要性を確信して十数万もの軍隊を送り込んできたイギリスとの敵対関係がかかわることで決定的となった。五大湖周辺からハドソン湾にかけてフランス系カトリック教徒の移動・定住がすすむと共に、近隣先住民との確執ばかりでなく、ニューイングランドやオハイオ川流域から北上してきた英国系植民者との対立が深まり、インディアンを交えた三つ巴の戦争が頻発して多数の先住民奴隷も生み出されたのである。1635年から1754年までの間に少なくとも十度におよぶ大規模な戦争が生起し、時に白人側は免疫のないインディアンに対して天然痘菌を散布するなど細菌戦争も仕掛け、驚くほど多数のインディアンが病死した。1640年代の三次にわたる白人側の挑発による戦争は、19世紀までつづくインディアン諸族相互の代理戦争の原型となった。病原菌と戦争で森から先住民が居なくなることは、新来の移住者たちにとっては実に好都合なことであった。1660年の戦争はヌーヴェル・フランスの国王直轄化をもたらし、2万名余のイロクォイ征討軍がフランスから送り込まれて「セントローレンス商業帝国」はここに確立を見た。直轄化が果たされるや植民地資源を利用して植民地と本国の各地に各種新規産業が勃興し、重商主義の最盛期「コルベール時代」が到来した(旧稿参照)⁽⁶⁾。ちなみに、この「コルベール時代」以後フランス革命の時代まではフランスの奴隷貿易の最盛期で、フランスの奴隷商人は先住民奴隷を含めれば少なく見積もってもおよそ120万人でいどの奴隷を売買したと推定されている。1672年にミシシッピ河を「発見」して仏領ルイジアナをルイ14世に献上したラ・サールも、自分が開発した全地方での奴隷取引の独占権を国王に約束された「奴隷商人」の一面を

(6) A.G.Price, *White Settlers and Native Peoples*. (Greenwood Press, Publishers, 1972) 59-66. 富田虎男「インディアン征服戦争」(猿谷要編『アメリカの戦争』、講談社「世界の戦争」8、1985) 101-148. 大原祐子・馬場伸也『概説カナダ史』(有斐閣選書、1984) 38-48. 藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』(朝日選書、1974). C.W.Cole, *French Mercantilism 1683-1700*. (Octagon Books, 1965) 250.

持つ探検家であった⁽⁷⁾。

17世紀末からの英仏両国の北米での植民地争奪戦は熾烈をきわめたが、1689年のウィリアム王戦争は、いわばハドソン湾一帯の毛皮資源争奪のための戦争で、19世紀イギリスの歴史家シーリーが「英仏第二次百年戦争のはじまり」と評した戦争であった。1701年から13年に至るまでのアン女王戦争も、やはりハドソン湾地域の覇権をめぐる戦われた戦争であった。この折の戦闘は、アブナキ・インディアン＝フランス連合軍 対 英領マサチューセッツ植民地軍という図式で戦われている。フランス側はこの戦争によってニュー・ファウンドランドの漁業権益を手中に収め、一時大きな利益を上げた。

しかし、オハイオ地方での毛皮交易路の争奪を直接の契機として1754年に勃発したフレンチ・アンド・インディアン戦争こそが、ハドソン湾周辺の毛皮取引の権益をめぐる決定的な争いであり、ヌーヴェル・フランスのみならず北米全域の支配の雌雄を決する戦いであった。ミシシッピに通じる南への通路を求めていたフランス人毛皮商人としては、オハイオ河の獲得は至上命令であった。オハイオ河を制して更にミシシッピの航行権を手中に収めれば、ケベックからニューオーリンズに至るまでの広大な地域がフランスの勢力圏に入るはずであった。一方、英国系入植者たちは1745年までにアレゲニ台地を越え、エリー湖南西岸のサンダスキーにまで進出していた。1750年頃までには、オハイオへは東から農地拡大をめざす英国系農民や毛皮獲得をめざす行商人 packmen たちが殺到するようになっていた。当時、イギリス領植民地では毛皮の取引は“the grand business of the young men”と言われ、オハイオの周辺やエリー湖の沿岸からは1万ないし1万5000枚の単位でビーヴァーやバッファローの毛皮が送り出されていたし、また、たとえばジョージ・ワシントンに財産の基礎を準備したオハイオ会社はこの地方で毛皮取引と土地投機に狂奔した多数の土地投機業者の一例であった。そうした土地会社には無数の無断居住者 squatters が

(7) W & A デュラント『世界の歴史：絶頂期のフランス／クロムウェルとミルトン』（新田一郎・三浦精一訳、日本ブック・クラブ、1970）第23巻、70-71。R.Stein, “Measuring the French Slave Trade, 1713-1792/3,” (*Journal of African History*, 19, 4, 1978).

寄生し、毛皮取引と土地の「囲い込み」に没頭していた。「自由か、死か」の演説で有名なアメリカ独立革命の志士パトリック・ヘンリーも、元はといえばインディアンとの条約により白人の立ち入りが禁止されたはずの土地を囲い込むことに奔走したヴァージニアの辺境農民で、イギリスによる数かずの高圧的な関税政策よりも、むしろ直接的には英本国の先住民政策に大きな不満を鬱積させていた人物であった。イギリス本国としても、ヴァージニアやペンシルヴァニア辺境の英国系移民としても、やはりオハイオの獲得が当時は至上命令となっていた⁽⁸⁾。

むろん、戦争勃発の最も直接的な契機がこのオハイオでの毛皮権益の争奪にあったとはいえ、「北米大陸における英仏間の関ヶ原の戦い」とたとえられるほどのエポック・メイキングな戦争であったフレンチ・アンド・インディアン戦争の原因は、決して単に毛皮フロンティアの推移をたどるだけでは理解し得ない多面性を持っている。そうした多面性や複雑性を理解するためには、たとえば四元忠博氏が鋭く分析したように⁽⁹⁾、西インド諸島における英仏両国の長年にわたる角逐をも併せ考察することなどが是非とも必要と思われる。ただ、四元氏や多くのアメリカ史家のコメントとは異なって、当時のカナダは実際には単に「カインに下された不毛の土地」「フランス人にとっては雪に覆われたただの荒野」⁽¹⁰⁾という以上の意義を持つ土地だったのであり、毛皮をめぐる攻防やインディアンとの相互の関係は、毛皮の取引に関与した商人・官吏やアメリカ

(9) 四元忠博「旧植民地貿易政策と七年戦争」(埼玉大学『社会科学論集』第63号、1988) 149-187。

(10) 四元上掲論文、174。わが国のほとんどの経済史家はW・フォークナーにならって英領の農業植民地の意義を強調する反面、フランス系移民の毛皮取引の意義を軽んじる傾向がある。しかし、そうした対比は大抵は英国系移民による大規模な毛皮取引についての実証や吟味を欠いている上、質量共に未曾有の変化を伴っていたアメリカ植民地時代の商業・流通の発展を見落としている。毛皮取引 Indian Trade を軽視したこうした見解は、根本的には、「先住民との係わりから見たアメリカ史」という視点を歴史家が長いあいだ持たなかったために生み出されたものである。たとえ上のような対比が重要とは言っても、それは当時の毛皮取引の実体を具体的に検証し、また毛皮圏とかかわった13州植民地の農業やプランテーションの拡大の様相、土地投機の進展などを更に詳しく検討する作業を前提としなくてはならない。

への移民たちにとって、やはり当時は第一義的に重要な意義をはらんでいたように思える⁽¹¹⁾。結局、毛皮フロンティアの歴史の流れを分析するに際しては、西インド植民地、北米大陸部植民地との連動を考え併せながら、「ヨーロッパ諸国の侵攻により、カナダからブラジルに至るまで一個の有機的なプランテーション社会が成立していた」⁽¹²⁾との観点に立って、毛皮を煙草や砂糖などの植民地ステイブルズと同様な枠組みの中に位置づける作業が必要ということになるだろう。

ともあれ、フレンチ・アンド・インディアン戦争ではフランス側の兵士の九割がインディアン兵により構成されたこともあり、実質的には先住民が英仏両国の植民地争奪戦争の「楯」として利用された戦争であった。「セント・ローレンス商業帝国」の毛皮フロンティアにおける英仏両国の相剋には、今日の我われから見れば想像を絶した凄まじい一面があり、相互の頭皮剥ぎや拷問をはじめ、耳削ぎや鼻削ぎ、釜茹でなどサディスティックな見せしめの虐待が捕虜や敗兵に対して至る処で行われた。両親の目前で子供を壁にたたきつけたり、斧やナイフで武装したインディアンの列の間を丸裸で走らせて「勇氣」を試すといった拷問刑などもあった。そうしたこともあって、戦争終結の当時、現カナダ領内には黒人奴隷を上回るインディアン奴隷が生まれていたとも記録されるような結果となった⁽¹³⁾。戦争終結後、敗走したフランス人たちはミズーリを下ってその中流のセント・ルイスに辿り着き、ルイジアナを北から開拓したり北西部

-
- (11) 名譽と奢侈を極度に尊重する風潮の中で誰もが毛皮フロンティア（カナダ）の獲得に躍起になっていたからこそ、七年戦争のさ中、たとえば次のような皮肉まじりの問答をヴォルテールは『カンディード』の中に書きつけたのである。「君はイギリスを知っていたんだっけ。やっぱりフランス同様きちがいの国ですか。」「きちがいのってちょっと類は違います。ご承知のとおり、この二つの国はカナダでわずかばかりの雪を争って戦争している。そしてこの結構な戦争のために、カナダ全体の値打ち以上の費用をつかっている」（岩波文庫、吉村正一郎訳、23章）。
- (12) R. Luraghi, *The Rise and Fall of the Plantation South*. (New Viewpoints, 1978) 44-54.
- (13) Lauber, *op. cit.*, 93-94. 今津晃前掲書、139-142. W・T・ヘーガン『アメリカ・インディアン史』（西村頼男・野田研一・島川雅史訳、北海道大学図書刊行会、1983）1～2章。

の毛皮資源を捕獲してゆくことで起死回生をはかった。しかし、フランス軍に参加させられたインディアンの多くは、イギリスの優位が確定するに従って悲惨をきわめる境遇に陥った。フレンチ・アンド・インディアン戦争の時期にイギリス軍の総司令官であったジェフリー・アマスト卿は、インディアンは買収するよりも処罰する方がふさわしいと考える軍人であり、例えばポンティアック・インディアンなどに対して天然痘菌撒布による細菌戦争を敢行した。フランス人とインディアンの居なくなったオハイオやデラウェアには、ヴァージニアやペンシルヴァニア、それに遠くアイルランドやドイツ、スコットランド、イングランドから猟師、農民、そして土地投機業者が殺到し、この地域の「毛皮帝国」の頂点にはフランス国王に替わってイギリス国王が君臨することになった。「セント・ローレンス商業帝国」は、結局、イギリス帝国の怒濤に呑み込まれる形で崩壊するに至った訳であるが、当初よりイギリス領13州植民地の先頭に立って毛皮取引を大々的に主導したのは、いわゆる北部植民地諸州が結成した「ニューイングランド連合」であった。

